眉や目の角度の変化が顔の形状知覚に及ぼす影響の検証

水永　勇利

自身をよりよく見せようとする試みの一つが化粧である。近年，若い女性を中心に顔が小さいこと(小顔)になることに関心が高まっている。また，小顔に見せるための化粧や服装の様々なテクニックがファッション雑誌やテレビ番組で特集されている。しかしそのようなテクニックはメイクアップアーティストなどの個人的見解によるものも多く，その知覚的な効果が科学的に実証されているものはまだない。本研究では一般に小顔に見せる効果があるとされているメイク術の一つを取り上げ，その効果について心理物理学的手法を用いて検証した。

本実験では，眉をつり眉にすると小顔に見えるというメイク術の効果を検証した。それと同時に，顔認知において重要な役割を持つとされる目による小顔効果に関しても検証した。そのため，眉の角度，目の角度が操作した標準刺激と，顔の輪郭を操作，同じ顔の痩せた小顔のものから太った大顔のものまでとなる比較刺激を用意した。各試行では準刺激と，比較刺激がコンピュータ画面上に並んで表示された。実験参加者はそれらのうちよりスリムに感じられるほうを選択した。各標準刺激における輪郭の大きさの主観的等価点を上下法によって推定した。

実験の結果，たれ眉，たれ目，つり目に変化させると顔がより大きく見えることが分かった。つり眉にすると小顔効果が生じるという仮説は支持されなかったが，その原因は標準刺激において操作されたのが角度だけであったことが考えられる。通常メイクを行う場合，角度だけでなく長さなども変化させると考えられることから，角度の変化だけでは十分な小顔効果が得られなかったと推測できる。(基礎心理学)